

平成24年度 B小学校

研究テーマ

一人一人のニーズに応える支援の在り方を探る —どの児童もいきいきと活動できる学校をめざして—

1. 課題設定の趣旨

本校では各学期に1回、管理職・特別支援教育コーディネーター・教務主任・特別支援学級在籍児童担任・特別支援教育部・養護教諭を構成メンバーとした校内委員会を行っており、主に特別支援学級在籍児童の学校生活や学習の様子・支援の在り方について話し合い、共通理解を図っている。また、通常学級に在籍している支援を必要とする児童についても、個別の指導計画を作成し、課題や手立てについて話し合いを持っている。

昨年度は校内研修として、巡回相談のアドバイザーに、参観した児童の様子だけでなく「通常学級で行う特別支援教育」などについても指導を受けた。実際に校内にいる児童の様子とその支援法を聞くことは一般的な手立て・支援方法を聞く以上に即、児童への指導に活かせるものであった。

特に今年度は、発達障がいのある幼児2名の入学が早くから分かっており、幼稚園・保育所への参観も数回に渡り行ってきた。第3回の校内研修では、その幼児への入学時の配慮についても確認でき、不安やつまづきなくスムーズに入学式を迎えることができた。支援方法は児童一人一人によって全く違う。前日に予行を行うことで入学の第1歩をうまく踏み出した1年生だが、全てが新しい学校生活の中でいろいろな困ったことにぶつかることが予想される。学校が、全ての児童にとって楽しく安心して過ごせる場となるよう、今年度も引き続き研究テーマを「一人一人のニーズに応える支援の在り方を探る」とし、実践を深めることとした。

2. 実践・研究の計画、方法

- (1) 校内委員会…年間4回
- (2) 巡回相談、校内研修…学期ごとに1回

3. 実践・研究の内容

(1) 校内委員会

- 第1回校内委員会…昨年度からの引き継ぎ事項の確認
個別の指導計画作成について連絡(チェックリスト配布)
新1年生支援体制づくりについて協議・入学式についての連絡
- 第2回校内委員会…児童の様子についての共通理解
実態把握を基に支援内容の検討
個別の指導計画の長期目標・短期目標の検討
- 第3回校内委員会…個別の指導計画の前期達成状況の検討
実態把握を基に支援内容の検討

○第4回校内委員会…個別の指導計画の後期達成状況の検討

来年度入学予定の要支援幼児について共通理解を図る

(2) 巡回相談・校内研修

○第1回巡回相談・校内研修…支援を要する児童の参観

参観時の様子とその支援、発達障がいについて

○第3回巡回相談・校内研修…支援を要する児童の参観

参観時の様子とその支援、発達障がいについて

○第3回巡回相談・校内研修…支援を要する児童の参観

参観時の様子とその支援、「場面緘黙」について

4. 実践・研究のまとめと今後の課題

○入学式に向けての取り組みと成果

今年度、早い段階から入学が分かっていた高機能自閉症の診断のある幼児と、広汎性発達障がいの診断のある幼児について、数回幼稚園・保育所への参観を行った。2人は初めてのことにとても緊張するため、入学式前日に学校へ来てもらうことにした。教室へ入る、自分の席を見つける、式場へ行くなどを実際に練習し、式場でも当日座る席に座った。初めての広い講堂は2人にとって不思議だらけで、担当者を質問攻めにした。しかし、こうして前日に体験しておいたことで、入学式当日は2人手をつないでなかよく入場し、とてもスムーズなスタートを切ることができた。また、友だちとの関わりが上手でない2人だが、1日早く会ったことで自然とお互い仲良くなることができた。

○支援を要する児童への支援と成果

1年生の高機能自閉症の診断のあるAは、友だちと話をしたり遊んだりすることができるが、担任の発言やきまりを守るということにこだわりが強く、違うことをしている友だちを強く非難してしまうことがある。また、衝動性が高く、言語理解の弱さがあるため、友だちとの行き違いが多くトラブルになることがあった。友だちに対して注意したい時に、押す・叩くなど言葉より先に行動してしまうことも多かった。対人関係に困難さを抱えており、「～しなければならない」＝「全ての人が」という思いがある。研修では、特性を理解したうえで「いろいろな方法がある」と教えることの大切さを学び、通常学級担任、特別支援学級担任ともに「〇〇した方が良いね」など一番良い方法を教えることを心がけた。何度もトラブルを繰り返してきたが、少しずつ自分で気がつけるようになってきた。

広汎性発達障がいの診断のあるBは、こだわりが強く時間や周りを気にせず行動してしまう。また、先のことが分からないと不安を示し、学習中でも、次はどうするのかを度々担任に確認しに行くため、時間を意識できるよう教室にタイムタイマーを置き、後どのくらいでその作業を終えなければならないかが分かるようにした。視覚的に赤い部分が減っていくタイマーは、時計や時間の感覚が分かりにくい他の児童にも有効であった。少しずつではあるが、「急ぐ」という行動が見られるようになってきた。また、毎朝、黒板の隅にその日の予定を書き、学習中でもできるだけ1つ先まで指示するように配慮した。

2年生のCは、朝のスタートでつまづくことと次の行動に移ること難しい。また興味のあることとないことがはっきりしており、板書は苦手である。そこで、1年生の時から使っている1日の行動カードで何をどのようにしたら良いか見通しが持てるよう支援を続けている。また、学級担任

が予めその日の板書をCのノートに朱書きして渡し、みんなが写す時になぞる、というCとのルールを作って実践している。守れることはまだまだ少ないが、何を学習するのかがよく分かり、学習に向かいやすくなっている。

3年生のDは、てんかんの脱力発作がある。激しく転倒することはなく、頻繁に起こるものでもないため、指導者が気づきにくい。本人も周りの目を気にしているため、他の児童には気づかれていない。学級担任が「てんかんノート」を作り、分かる限りで日時、発作の時間、状況などを記録し、保護者に伝えている。また、発作の際には安全の確保を行い、おおげさに対応しない（クラスの子どもに不安感を与えない）などの注意事項も参加した教員全員で確認した。

昨年度に引き続き、巡回相談を活用し、実践を進めてきた。教室整備など基本的な土台ができた状態でスタートがきれ、すっきりとした環境の中で学習活動がなされている。また気づいたこと、気になることの情報交換もその都度行われており、指導・支援の助けとなっている。

2年間を通して感じたことは、支援を要する児童への手立ては、障がいのある児童にとって必要な支援であるが、全ての児童にとっても分かりやすいということである。こうした支援が当たり前のものとして定着すれば「特別な支援」は「特別」でなくなるように思う。

これからも教職員全員がそうした感覚を磨きながら、児童一人一人が安心して通える学校を目指して実践を続けていきたい。